

俺ガイル。 if ～比企  
谷八幡の『本物』～

神代時雨

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

もし、比企谷八幡にとても仲の良かった元友人がいたとしたら。

もし、その2人が再会したら。

そんなオリジナル展開で進めていく俺ガイルのifストーリーです。基本的には原作の時系列に沿いつつも、イベント等は追加して書いていくつもりです。初投稿作品ですが頑張るのでよろしくお願いします。

# 目次

## 第1章

1. そして、比企谷八幡は何かを感じ始める。 | 1
2. やはり、雪ノ下雪乃は毒舌である。 | 10
3. イケメン転校生が俺の知り合いなのは間違っている。 | 19
4. 斯くして、比企谷八幡は関係を考える。 | 27



## 第1章

### 1. そして、比企谷八幡は何かを感じ始める。

ふと気がつく、夕暮れの公園に俺は一人で立っていた。

周囲に人の気配はない。

なぜ自分がここに居るのかもわからない。

「おーい！ハッチー!!」

人の気配すらしなかった公園にいきなり誰かの声が響いた。

声の方向を見ると、3人の少年が道路で公園の方を向いて手招きをしていた。

「何やってるんだよー！ハッチーも早く行こうぜ！」

刹那、嫌な予感がした。

3人の少年が道路を歩いて進んで行く。

ダメだ。

行つてはいけない。

自分の直感が危険信号を発している。

嫌な予感はさらに増していく。

3人の進む道の先から、黒い影のようなものが近づいて来る。  
ダメだ。

逃げろ。

行つてはダメだ。

頭の中では出てくるのに声が出ない。

そして次第に黒い影は大きくなっていき、3人の少年はその影に：

.....

「…谷、おい起きろ比企谷」

ふと気がつくと、いつもの教室にいた。

周囲のクラスメートの視線が俺に注がれている。

「あの、平塚先生。一体何が…」

俺が不意にそう呟く。

「ほう。私の授業であそこまでぐつすりと寝て、寝言まで言つたくせにとぼけるとは良い度胸だな」

その言葉と同時に次第に意識が覚醒して、周囲の状況を認識し始める。

机の跡がついて妙に痛い肘とノートについたヨダレの跡が目に入る。

あ、俺寝てたのか。

つてか寝言つて一体何を言つたんだ俺。

こんな所で新たな黒歴史とか作りたくねーよ。

というか、俺の場合学校生活そのものが黒歴史みたいなものだから関係なかったわ。

寝言のことを鬱陶しい友達にからかわれたりすることもなし、やつぱりぼつちが最

強なんだよなあ。

「なにをぼけつとしている。ほら、早く教科書の132ページを開け。あと比企谷、昼食を済ませたら職員室に来たまえ」

平塚先生はやや怒り気味で授業の続きを始めた。

そんな先生の態度に直感的に思う。

あつ、これヤバイやつだ。

それにしてもどんな夢を見てたんだ俺。

夢の事を必死に思い出そうとした時、ふと違和感を覚える。

それは、何か大切なものを置き去りにしてきてしまったかもしれないような、そんな

感覚だ。

わかりやすく言えば、喉に刺さった魚の小骨が取れずにイライラするような、そんな

違和感。

そんなことを考えながら、9月と言ってもまだ日差し強い窓の外を眺めると、再び教壇の平塚先生と目が合う。

「おい比企谷。昼寝の次は余所見とは、とても良い度胸だな。職員室で覚悟しておけよ」  
そんな先生の一言に背筋が凍る。

あつやバイこれ本格的に殺される。

そう感じた俺は、今ある違和感は後で考えることにして授業に集中することにした。

昼休み、いつものベストプレイスで昼食を食べながら、どんな夢を見たのか、この違和感なんなのかと再考する。

が、正直に言うとは何も分らない。

心どこかに、何か大切なものを押し込んで忘れているような気がしなくも無い。

だが、それが何なのか。

そして何故、今日のこのタイミングでこの違和感が出て来たのか。

結局の所、昼休みの俺の思考の中で結論と呼べるものは何一つ出てこず、謎が増えるばかりだった。

昼食を取った俺は平塚先生に言われた通りに職員室へ向かう。

「失礼します。2年F組の比企谷八幡です。平塚先生に用があつて来ました」

その言葉を聞いたのか、平塚先生がこちらに気付く。



「ようやく来たか。まあとりあえず、座れ」

俺は言われた通りに椅子に座る。

昼寝のことで怒られると身構えていたが、平塚先生の口からは意外な言葉が発せられた。

「比企谷。お前、大丈夫か？」

「は？」

あまりに予想していなかった質問に、つい反射的に反応してしまう。

「教員に向かつてその態度はなんだ。そんなに私のセカンドブリットをくraitたいのか？」

「い、いえそんな訳じゃ……。ただ怒られると思っていたので意外で」

俺がそう言うのと平塚先生は眉をひそめる。

「私が少しも怒っていないように見えるのならお前の目は前以上に腐っているぞ。私はまだ怒っているし、寝たことに関してはきっちり内申点を下げたおいた」

ちくしよう、余計な事を。

「ただ、寝ている時のお前がとても辛そうな顔をしていてな。少し心配になったんだ。最近何かあったのか？」

「どうやら寝ている時、俺は辛そうにしていたらしい。」

しかし、今の俺からすれば何故辛そうにしていたのかが理解できない。

「最近何かあったのかと言われましても心当たりはないですし、そもそもどんな夢を見たのかも全く覚えていなくて…。そう言えば、俺はどんな寝言を言っていたんですか？」

それを聞くと平塚先生は怪訝な顔をする。

「本当に覚えていないのか？お前は教室内に響くような大声で「逃げろ」と叫んだんだぞ？」

え？

理解が追いつかない。

え？

俺大声でしかもそんなこと言ったの??

マジかよなんも覚えてねえよ。

てか本当にどんな夢を見ていたんだよ俺。

どおりでクラス中から視線を向けられる訳だ。

ならさつき由比ヶ浜と戸塚が「ヒツキー（八幡）大丈夫？」って心配聞きに来たのはそういう事か。

訳分からなかったからラブリーマイエンジェル戸塚たんにまで真面目な顔で「は？」

とか言っちゃったよやばいどうしよう。

そして心配そうな目で俺を見てくれてた戸塚マジ天使結婚しよう。  
でも本当に今後どうしよう。

この事でいじられて俺のプロぼっちライフが色々な意味で壊されたりしないよね？  
ていうかこれ新たな黒歴史確定じゃんどうしよう。

そんな、明らかに焦っている俺を見て平塚先生は言う。

「ま、まあ何も無いならいい。誰だつて辛い夢を見ることはあるしな。私なんかこの前  
また婚活に成功する夢を見てな。起きて夢だとわかったときは本当に辛かった」

平塚先生が本当に辛そうに言う。

つていうか本当に誰かもらつてあげて。

「ただ、本当に辛い時が来たらいつでも相談に乗ってやるから遠慮せずに言いたまえ。  
何度も言うが、私は君たちの教師だからな」

こちらを見ながら平塚先生は得意げに言う。

平塚先生がやけに頼もしく見えた。

「ありがとうございます。では、失礼しました」

「ああ。それと、午後の授業は寝るなよ?」

俺が話を切り上げようとすると、平塚先生に釘を刺される。

午後の数学の授業の時にいろいろ考えようと思っていた俺は内心でギクリとしながらも、平塚先生を一瞥して職員室を後にした。

職員室を出た俺は、廊下を歩きながら大きなため息をつく。

わざわざ釘を刺さなくたって、午後の数学の授業なんて俺じやなくても寝てるだろ。

大体、人間誰しも満腹状態の時にわけのわからないものを見せられても眠くなるだけで何も学べない。

数学のいつもの貴重な睡眠時間が…。

心の中でどこかの神格もどきの宇宙人が「バレなきや犯罪じや無いんですよお」とドヤ顔で言ってくるが、寝言の一件もあるし今寝るのは怖い気もする。

そんなことを考えながら渡り廊下を歩いていると、初秋の心地良い風が吹き込んでくる。

その風を感じた俺は窓の外を眺める。

日差し自体はまだ強いが、8月に吹くような熱風とは違う、紛れもなく涼しいと感じる風だ。

途端、授業開始5分前のチャイムが鳴る。

俺は急いで教室に戻ろうとする。

再び、涼しい風が吹く。

その風は、俺に何か大切な事を伝えようとしている気がした。

## 2. やはり、雪ノ下雪乃は毒舌である。

チャイムが鳴り、ようやく6限が終わる。

教室の中が騒がしいが、そんな事お構い無しに俺は机に突っ伏した。

6限の時間に数学をさせるのは本当におかしいと思う。

ただでさえ昼食後で眠いのに、それに追い打ちをかけるように黒板に羅列される訳の分からない記号や数字。

それで眠くならない生徒は数学が好きか理系志望の奴だろう。

現に半数ほどの生徒は授業中に撃沈していた。

俺もいつもならそうする所のだが、寝るとまた変な寝言を口走りそうな気がして寝るに寝れなかった。

そして、黒板の数字と睡魔との戦いが終わった今、俺は疲れ果てて、何かをやる気にはなれそうにない。

いや、元々放課後に用事なんてあつてないようなものだし、奉仕部休んで帰ろうかなあ。

「おーい、ヒッキー」

いやでも奉仕部サボると雪ノ下から何言われるか分からないからなあ。

「ねえ、ヒツキー聞いてる?」

とは言えこのまま部屋に行つて寝るつて言うのもなあ。

今日のこともあるし…。

などと考えているとバアン、と机が叩かれる。

「私のこと無視するなし!!」

顔を上げると、そこには若干キレ気味の由比ヶ浜が立っていた。

「おお由比ヶ浜、居たのか。てかいきなり人の机叩くなよ。机が可哀想だろうが」

「ヒツキーが無視するからじゃん! さっきから呼んでたのに反応しないんだもん!!」

サラッと俺の自虐を無視して由比ヶ浜は問い詰めてくる。

「え? 俺の事呼んでたの? すまん気がつかなかった」

「ええ!! ヒツキー気づいてなかったの!?!」

いや本当は気がついてましたけどね。

あそこで顔を上げたら奉仕部行かなきゃいけない気がしたからステルスヒツキー使つて無視したら一人で行つてくれるかなあと思つてた。

まあこうなつたからには話を聞かないといけない。

「で、何の用だ?」

「一緒に部室にいこう！」

やだよ、面倒臭い。

「すまん、今日はあー、アレだ、用事があるから部活行けないわ」

由比ヶ浜が怪訝そうな顔でこちらを見てくる。

「ええ?! ヒツキーさつきまで机に伏せて寝てたじゃん！」

クソツ、ステルスヒツキー作戦が裏目に出たか。

てかなんでこんな時ばかり頭が回るんだよコイツは。

「そうだ！ 戸塚だ！ 戸塚と約束あつて待つてたんだ」

なんなら戸塚となら今から予定を作つてもいいまである。

いや、寧ろそうしよう。

今の俺には心の癒しが必要だ。

「彩ちゃんなら明日から群馬でテニスの試合だからつて5限の前に公欠扱いで早退したじゃん」

なん…だと…。

戸塚ああああ。

頼むから見捨てないでくれええええ。

「ねえヒツキー、さつきから嘘ついて部活サボろうとしてない？」



核心を突かれてギクリとする。

「ソ、ソynaコトナイヨ。ハチマンウソツカナイ」

「じゃあ一緒に奉仕部行こう」

おお神よ。

なぜ、なぜなぜなあぜ私を見捨てるのデス！

あれほど貴方に祈りを捧げたと言うのにいいい!!

答えは簡単。

俺が怠惰だから。

ああ、脳が震える！

そうこうしているうちに、俺は由比ヶ浜に連行されて奉仕部の前へとたどり着いた。

俺と由比ヶ浜は部室に入る。

雪ノ下が入り口の方を向く。

「ゆきのんやつはろー！」

由比ヶ浜がいつものように挨拶をする。

「由比ヶ浜さんこんにはは」

雪ノ下が俺の方を見る。

「こんには夢ヶ谷くん。今日は勝手に帰るんじゃないかと思ったわ」

おい誰だよ夢ヶ谷くん。

というか雪ノ下にすら知られてるのか？

「おい部屋に来て早々罵るのはやめろ。あと誰から聞いた？お前の交友関係だと噂とかあんまり届かないと思って居たんだが」

「あら。聞きたくて聞いたんじゃないわ。ただあれだけ噂になっていたら知らない方がおかしいわよ」

そう言いながら雪ノ下は読んでいた本に目を落とす。

え、ちよつと待て雪ノ下ってJ組だよな？

そんな所まで噂になってるとかやばくね??

俺が狼狽していると、雪ノ下が呆れた顔でこちらを見てくる。

「全く、目の腐つた男子生徒が教室で寝ながら発狂したなんて言う噂、当事者は貴方以外に考えられないじゃない」

「いやいやいやおかしい。その噂はおかしい。たしかに大声で寝言を叫んだらしいがそこまで酷くはない。だよな由比ヶ浜！」

「どうなの、由比ヶ浜さん」

俺と雪ノ下が同時に振り向くと、由比ヶ浜は自分に話が回って来ると思っていないかっ  
たらしく、「ふえ？わ、私!？」と言う素っ頓狂な声を出す。

「あ、あはは。あれは流石に発狂とも取れるレベル…かな」

おい由比ヶ浜。

たとえばそれが事実だとしてもここで言わないで空気読んでくれ…。

雪ノ下が軽蔑する様な視線を向けてくる。

「こちらを見ないでくれるかしら発狂くん。比企谷菌がうつるわ」

「おい俺の方を見ながら若干椅子を遠ざけるのやめてくれ。あと発狂くんって誰だよそれもう既に原型とどめてないだろ」

雪ノ下はそんな俺の反論を聞き呆れ顔のため息をついた。

「全く。それで、貴方は一体授業中にどんな夢を見ていたのかしら」

「いや、それが俺も覚えてないんだ。いったいどんな夢だったのか俺にも分からない」

雪ノ下は俺の返答を聞くと「そう」と軽く返事を返すと、再び読書を始めた。

由比ヶ浜は先程から携帯電話をいじっている。

部室がいつもの静けさを取り戻したので、俺も読書をしようとしてラノベのページをめくる。

が、先ほどの由比ヶ浜の反応が頭をよぎり、本の内容が頭に入っていない。

叫ぶって一体どんな夢を見たんだよ俺。やばい内容が気になって他の事が頭に入っ

てこない。

ふと、窓の外を見ると、そこには夕日で全てが紅に染まった世界が広がっていた。なにか、なにかが自分の記憶から思い出される。

俺は椅子を立ち上がり、窓に近づいて外の景色を見る。

雪ノ下と由比ヶ浜がいきなり窓の外を見だした俺を見て怪訝そうな顔をする。

「ヒツキーどうしたの？」と由比ヶ浜が尋ねてきたが、俺はそれに答えずに、窓の外を見続ける。

今日の日付は9月5日。

なにか、なにか大切なことがある気がする。

その時、5時の時報が鳴った。

9月5日、午後5時。

そうだ。

思い出した。

4年前のこの日、いつも行っていた公園で、俺はアイツと…。

唐突に奉仕部のドアがガタンツと言う音とともに開けられた。

そこには真新しい総武高の制服を着た顔立ちが整っている男子生徒が立っていた。

その生徒は走ってきたらしく、制服は乱れていて、息を切らしている。

俺はその生徒の顔を見て硬直した。

いきなりドアを開けた生徒に対して雪ノ下がやや表情を曇らせる。

「ノックもせずいきなり入ってくるなんて失礼ね。ここは奉仕部の部室よ。出て行ってもらえるかしら」

「待ってゆきのん！」

その生徒を追い出そうとした雪ノ下を由比ヶ浜が止める。

「由比ヶ浜さん、どうして止めるのかし…」

由比ヶ浜に続いて雪ノ下が俺を見て絶句するが、俺はそんなことにも気がつかず、その生徒を見ながら驚いた顔で止まっていた。

色々言いたいことはあるのだが、言葉が出てこない。

「な……んで……？」

ふと、口から出たのは疑問の言葉だ。

少年が口を開く。

「なんでって…、約束したじゃないか」

その少年は俺に笑顔を向けながらさも当然のような顔をして言う。

「4年以内に必ず戻ってくるって。そしてお前の周り全てが敵になっていったとしても、俺はずっとお前の味方だ！つてさ」

その少年は俺の方に近づいてくる。

「久しぶりだな、ハッチー。そして、遅くなつてごめん」

その言葉を聞いた俺は、両目に溜まった涙が一粒だけ、ポロツと頬を伝って落ちていった。

3. イケメン転校生が俺の知り合いなのは間違っている。

その時、俺は泣いていた。

「何でだよ。何でリヨウまで居なくなっちゃうんだよ！」

人気のない夕暮れの公園で俺は叫ぶ。

「ごめん……」

リヨウはそれ以上何も言わずに俯く。

「何でだよ……。トモキやえいじに続いてリヨウまで……。何でみんな俺の前から消えて行っちゃうんだよ！何で……」

「ハッチーだけじゃ無い!!」

俺が話し終わる前にリヨウが割り込んで来る。

「俺だって今まで通りにみんなと過ごしたかった。ずっとこの幸せな時間が続くって思ってた。俺だって海外になんて行きたくない。このままハッチーとトモキとえいじと4人で楽しく過ごして行きたかった……」

「リヨウ……」

リヨウも泣いていた。

両目から涙が溢れていた。

「でもな、どんなに言ったって、どんな事をしたってもうトモキは戻って来ない。今までみたいに4人で仲良くなんてできないんだよ！」

リヨウが泣きながら叫ぶ。

俺とリヨウの間に沈黙が訪れた。

その沈黙を遮るかのように5時の時報がなった。

リヨウは覚悟を決めたように俺を見つめて言う。

「ハッチー、俺は明日海外に行かなきゃいけない。けどこれだけは忘れないでくれ。俺はお前と会えて本当に良かったと思うているし、俺はお前を友達なんて軽い関係じゃないと思うていて、心から信頼している。そして、約束だ。今から5年以内に俺は必ずお前の前に戻って来る。だからハッチーも新しい居場所を見つけて俺の事を待っていてくれ」

その時、一台の車が公園の前で止まった。

「迎えが来たみたいだ。じゃあな、ハッチー。必ずまた戻って来て、その時はお前との約束を必ず果たす。そして、4人で過ごさせて本当に楽しかった。ありがとう」

そう言うのと、リヨウは車の方へと歩いていく。



「…頼むよ…行かないでくれよ。お願いだから俺を1人にしないでくれよ…」

俺の声を聞いたリヨウが車の前でこちらを向く。

「ハッチー、大丈夫だ。たとえどれだけ離れていようと、ハッチーの周りが全て敵になつていたとしても、俺はお前の味方だ」

リヨウは最高の笑顔でそう言つて車の中へ消えて行つた。

公園に1人残された俺には分からなかつた。

リヨウの最後の言葉の意味も、この心の痛みも理解できなかつた。

俺の心に、みんなが消えてしまったと言う事実のみが突き刺さる。

心が痛い。

過去にイジメを受けていたことがあるが、その時よりも遥かに痛かつた。

大切なものを失う辛さを俺は初めて知つた。

心が痛い。

悲しさが心に残る中、俺はリヨウと約束した居場所を見つげるために頑張ろうと思つた。

が、反対にこれだけ痛くて苦しいなら、大切なものなんて作らなければいい。

そうすれば傷つく事もなくなるんじゃないか。

そう思い始めている自分も心のどこかにいた。

・  
・  
・  
・

転入生が来る。

それはクラスでワイワイガヤガヤしているリア充達にとつてはとても新鮮で楽しみなイベントだ。

ましてや義務教育でない高校での転入生など珍しい。

さらにその転入生が帰国子女だという事を知ればパーティーでも始めてしまうかもしれない。

男子は殆どが「女子なのか?」とか「可愛い子だといいな」と言い、女子は「男子かな?」とか「イケメンだといいね」などと言っている。

自分たちに都合のいいようにしか考えられない。

それがリア充。

あー、本当に俺はぼっちでよかったわー。

そんな都合のいい解釈して夢見る集団に入らなくて済むってなんて素晴らしいんだろう。

ぼっち最高。

確かにぼつちだと急な授業変更とか知らなくて遅れて怒られたりするけどさほど問題じゃない：いや、それは結構痛いな。

特に苦手な理系科目移動多いし平常点まで下げられると結構やばい気が…。

ま、まあメリットには必ずデメリットが付きものだから仕方ない。

それにしてはぼつちのデメリットデカすぎる気がするんだが多分気のせいだ、うん。

そんなこんなでクラスの中は転校生の話で持ちきりだ。

日直で朝登校してすぐに転校生の情報を知った戸部が「つべー。海外帰りとかマジパネエっしょ」だの何だのうるさく言っている。

てか声デカ過ぎうざいから早く何処かへ行ってもらいたいまである。

そんなこんなで基本的にこんなリア充のキャツキャウフイベントとは関わりのないぼつちな俺だが、今回ばかりは転校生のことを俺も知っている。

いや、知ってしまったのだ。

昨日の奉仕部で。

朝のホームルーム開始のチャイムがなり、担任の先生が入ってくる。

「おーいみんな席につけ。突然…のはずだったがみんな知っているようなので端的に言う、今日からこの2年F組に新しく仲間が入ることになりました。これから自己紹介をしてもらうので静かに聞くようにしてください。じゃ、入って〜」

先生がそう言うと、教室のドアが開き、そこから顔立ちの整った爽やかな少年、リョウが入ってきた。

一部の女子からは「キヤー」「イケメンじゃん」とか声上がる。

若干一名が「おお？これはまさかの三つ巴パターン!?ぐ腐腐」とか言うことを言っていたような気がするが気のせいだ。

てか三つ巴ってなんだよその中に俺入ってないよね？

リョウが黒板に丁度いい感じの大ききで、高生遼と書いた。

「タカオイリョウです。つい先日まで海外にいて日本に帰ってきたばかりなので分からないことが多いと思いますが、これから半年間、F組として頑張っていきたいのでよろしくお願いします」

挨拶が終わるとクラスに拍手が起こる。

「と言うわけで、彼が今日からクラスの仲間になる高生だ。席は…そうだね。比企谷の後ろの空席でいいか」

「わかりました」

リョウがこちらへ来る。

席に向かう時にリョウがこちらを一瞥したが、俺はそれに気がつかないふりをして無視する。

それを見てリヨウは軽く微笑んだ。

「グハアツ!!!コレ三つ巴確定じゃん。キーマーシューターワー」

「ギタイしろし。てか姫菜鼻血!ほら、ちーんして」

なんか嫌なやり取りが聞こえたが気のせいだ。

気のせいに違いない。

リヨウが隣の席の女子に「よろしく」と爽やかに言うと、女子は頬を赤らめてたじろぎながら、

「こ、こちらこそよろしくね。分からないことがあったらなんでも聞いてね」と言い返す。

それにリヨウが「ありがとう」と笑顔で返すと女子は恥ずかしがって前を向いた。

さすが顔面偏差値高い系男子。

爽やかな挨拶一つで女子を惚れさせる典型的なタイプだな。

もし俺が真似しようものなら「何言ってるんですかこの変態!通報しますよ!!」とか言われて本当に通報されるまでである。

いやでもあやせさんに罵ってもらえるのならそれはそれで…って何を考えているんだ俺は。

席に着いたりリヨウが俺の方をみて「よっ」と軽く挨拶をして来た。

「ここまできて無視をするのも違うので俺は「おう」と軽く答えて前を向く。

「では、一時間目は移動教室なので、素早く移動してください」と担任の先生が言い終わると同時にホームルーム終わりのチャイムが鳴った。

たとえ昔信頼してた奴が居たとしても、俺はぼっちで居続けるつもりだ。

期待したって無駄に終わるだけ。

結局は悲しみが残るだけ。

いつだってそうだった。

小・中学生時代に嫌と言うほど惨めな思いをして、俺は人と関わることを避けるようになった。

高校時代に期待して出だしを失敗して以来、ぼっちになる事に迷いもためらいも無い。

い。  
そのはずだ。

それなのに、なぜ心がモヤモヤするのか、俺には分からない。

あれだけ裏切られて失望するのに、まだ何処かで期待している自分がいる。

そんな自分自身に嫌悪感を覚えながらも、約束を守って俺の前に現れたリョウに期待している俺がいた。

#### 4. 斯くして、比企谷八幡は関係を考える。

午前中の授業が終わり、昼休みになる。

大半のクラスメートはそのまま教室で友達と昼食をとるが、あんないかにもリア充ですオーラが漂う場所で昼食を食う気になれない俺はいつものベストプレイスへと向かう。

決して一緒に食べる奴がいないからというわけじゃない。

俺にだって一緒に昼食を食べる奴ぐらいいる。

例えば戸塚とか、戸塚とか、あと戸塚とか。

戸塚は昼食を食べた後に昼練があるから、俺なんか時間に時間を取らせたくないと思いついて、極力一人で食べている。

まあ雨などでどうしてもベストプレイスが使えない日は一緒に食べることもあるが。

今日は快晴だしベストプレイスはさぞ気持ち良いだろうと思いついて渡り廊下のドアを開ける。

「ジャジャーーン。俺の読み当たりー！やはりきたなハッチー！」

ドヤ顔で仁王立ちしながら人差し指を俺に向ける不審人物を見て、俺はそのまま静か

にドアを閉めた。

.....

「酷いなあ。いきなりドアを閉めることはねーだろ」

リヨウが少し機嫌を悪くした口調で言う。

「てかなんでお前居るんだよ。俺は授業終わってトイレ行ってからすぐ来たんだけど」

「お前が教室を出た時点でここだと予想できたよ」

え、何それ怖い。

もしかして心読まれた？

どこかの幼女と同じく超能力者なの??

俺は少し驚きつつ「ここがわかった理由は？」と尋ねる。

「簡単だ。まず最初にお前の机の横にあつた昼飯がなくなっていた。これはどこか別の場所<sup>①</sup>で昼食を食べると予測できる。そしてぼっちのお前が一人で行く場所となれば、昼休みに人気のない体育館裏か、教務棟屋上か、理科棟3階の休憩スペースのどこかに絞り込まれる」

いや俺がぼっちの前提で考えられてるの酷くない？



俺にだつて友達はいるぞ？

戸塚とか戸塚とか：いやでも戸塚は天使だから友達には入れられないか？

ふと頭にむき苦しい材モザイクの顔が思い浮かんだがすぐに振り払う。

お前が戸塚のことを考えている俺の思考に割り込んでくるなんて万死に値するぞ。

そんな思考を巡らせている俺に構うことなくリヨウは続ける。

「そして理科棟3階は教室棟の窓から丸見えで昼休み他の生徒に見られる可能性があり、教務棟屋上は教務室近辺を通るため、平塚先生に見つかると思われ。よつてお前はこの特別棟裏で昼食を食べると予想したわけだ」

「いや確かにその通りなんだけどなんで平塚先生を面倒くさがっているのがお前に分かるんだよ」

「いやあ、昨日話したときに確かにいい先生だとは思つたけど結構しつこそうだったから絶対ハッチーは絡まれたく無いとか思うだろうなあ」と

いや少し話しただけでそれとか人の思考読みすぎだろ。

将来探偵でもやればいいんじゃないかね？と心の中で感心する。

「相変わらずの洞察力だな」

俺が呆れたように言うとりヨウは苦笑する。

「海外帰りなめるなよ？最初は言葉も分からず行動で何を言っているのか理解していた

んだぞ俺」

「それは凄いな。まあお前はあの頃からずっと観察力とか洞察力とか高かったしな」

まあ俺もぼっちのおかげで今は洞察力とか結構ついたけどな。

その結果相手の顔を見るだけで敵意があるのかわからないのかすら分かるようになったし。

いや、周りが全員俺を嫌っているから分かるだけですな。

自分で思っていて悲しくなってくる。

「で、お前は何の用でここにきたんだ？教室のやつらと交流しないと馴染めなくて俺みたいなぼっちになるぞ」

「教室で食べても良かったんだけど、クラスメイトと関わるよりハッチーと昼飯を食べる方が楽しそうだと思うたからさ」

「俺なんかと食べても別に楽しくはないだろ」

てかほとんど人と食べたことないから何を話すのかすら分からないし。

「少なくとも5年振りに日本に帰ってきた俺にとって、お前は俺の唯一の友達みたいなところあるし」

「友達、ねえ…」

ふと、昔のことを思い出す。

俺がいて、リョウウがいて、そしてあと2人。

4人でよく会っていた時のことだ。

確かにあの頃であれば、俺とリヨウは確実に友達だったのだろう。

だが、今の俺にはリヨウが本当に友達と呼べるのかはよくわからない。

そんな俺を見て、リヨウが口を開く。

「やっぱり、もう俺のこと友達なんて呼べないよな」

そう言ったリヨウの表情は、哀しみと後悔が入り混ざったようなものだった。

「確かにあの時、傷ついたハッチーを助けられなかった、置いていくしかなかった俺に、友達を名乗る資格なんて無いのかもしれない。でも、これだけは言わせてくれ。俺は今でもお前を信頼している」

信頼。

その言葉がなぜ自分にここまで突き刺さったのかはわからない。

リヨウ自身が言っていたように俺の心のどこかにはリヨウを友達と見れない自分がいるのかもしれない。

だが、リヨウから信頼という言葉が発せられた時、何故かわからないが、まるで奉仕部に居るような心地良さを感じた。

両者の沈黙の中、「なあ」と自信なさげにリヨウが口を開く。

「俺がハッチーとまた友達になるためにはどうすればいいかな」

リヨウがゆっくりと訪ねてくる。

4年前、俺と離ればなれになったリヨウ。

それが、リヨウの本心ではない事も、リヨウが俺たちのことを一番大切に考えてくれていた事も知っていた。

4年前の自分であれば、少しはリヨウを責めたのかもしれない。

なら今の俺はどうなんだ？

自分がほとんど忘れていたような約束を守って、リヨウは俺の前に現れた。

そんなの、決まっている。

「ま、いいんじゃないの？」

その言葉を聞いて、下を向いていたリヨウの顔が上がる。

「お前が居なくなつた件に関して言えば、お前は約束をしっかりと守って俺の前に現れた。少なくとも俺はそんなお前を拒んだりする気はねえよ。だからお前はお前らしくしていればいいと思うぞ。それに……」

急に言葉を詰まらせた俺を、リヨウが不思議そうな顔で見てる。

「それに、俺もお前のことは……嫌いじゃないし」

自分で言っていて恥ずかしくなってくる。

リヨウは俺の話の聞き終わると、先ほど見せた哀しそうな表情ではなく、嬉しそうな

表情でこちらを見てきた。

「そっか。ハッチーがそう言ってくれるならそうさせてもらうかな」

そう言いながらリョウが笑いかけてくる。

俺は、少しだけ4人でいた頃の雰囲気を感じつつ、昼食を食べ始めた。